

# ヒネ豚の発生要因と対策

千葉県・(株)ピグレッツ 早川結子<sup>ゆいこ</sup>

## 経済効率を下げる ヒネ豚

ガリ、ビグ、ヤモる……。地域によ  
ってさまざまな言い方がありますが、  
ヒネ豚とは、発育不良に陥って細く  
なってしまった豚を指します。被毛  
は粗剛で毛足が伸び、長く伸びた胴  
はヤギのように背骨が

浮き出て腹腔内の臓器  
だけが薄い皮膚に包ま  
れてぶらさがっている、  
そんな外見を呈する豚  
のことです（写真1）。  
日齢を知らずに彼らを見ても、体に対して頭  
部が大きく、垂れた耳  
の陰に苦渋に満ちた老  
け顔をのぞかせている  
のですぐに分かります。  
彼らは採食していても  
発育せず（写真2）、  
遅く、出荷までに健康  
豚よりはるかに日数を  
要します。また、さま



写真1 ヒネ豚の外貌。毛足が伸びて背中が出ている。

さまざまな病原体を排出して他の個体への  
の感染源にもなります。  
いうまでもなくヒネ豚は、飼料効  
率、疾病対策、さまざまな観点から  
経済効率を下げる要因であり、生産  
者の皆さまが、一頭でも少なくした  
いと思っっている厄介なものです。その  
彼ら（特に離乳後のヒネ豚）につい  
て、筆を執る機会をいただきました。

## なぜ「ヒネ」に なってしまうのか？

- なぜ正常に発育せず、「ヒネ」にな  
ってしまうのでしょうか？
- 生まれつき体が小さく、わずかな  
栄養しか摂取できない。
- 病気やそのほかのストレスによっ

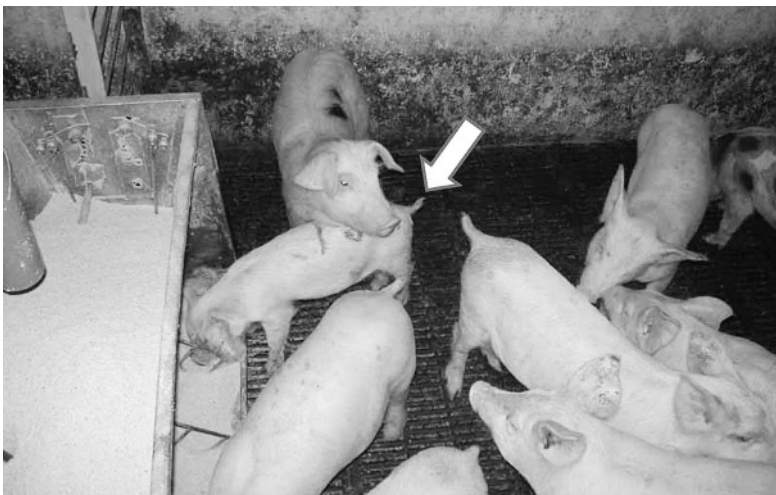


写真2 食べていてもヒネは治らない。

て食いが止まってしまおう。

●他の豚との競争に勝てず、栄養が摂りづらくなる。

こういったきっかけで、やがては摂食行動そのものが衰えてしまいます。狂ったバランスを戻そうとする力さえないというわけです。

従って、ヒネ豚になってしまったものをもとに戻そうとするより、ヒネ豚を出さないようにする予防が重要です。

ヒネ豚の予防のために、よくいわれる重要なポイントがいくつかあります。

- ① 離乳体重（5kg以上）と餌付けの成否
- ② 離乳時のストレス
- ③ 予防衛生管理と疾病対策

こういったことはこれまで繰り返し題名を変えて書き手を変えて、何度も説かれてきたことだと思えます。しかし、この仕事をはじめてまだ三と半年の私には、あまりにも経験が乏しく、自分の中で一般化できるほどの理論も組みあがっていません。そこで今回は、これまで見てきたさまざまな事例を、ケーススタディ

風に振り返ってみようと思います。生き物を相手にするうえで模範解答なんてありません。さまざまなケースを知っていただくことで、皆さまが実際にとることができる対処にバリエーションが増えたなら、私としては上出来だと思います。

### 実はさみしかった！

離乳後の母子分離症は、要するにお母さんから突然引き離されて、子豚が心理的に大きなショックを受けるといふことです。離乳子豚が仲間のおなかを鼻で押し上げたり、寝ている仲間の尻尾や包皮をさかんにしやぶったりしているのを見たことはありませんか（写真3）。お母さんのおっぱいが恋しくてそういった行動に出るのですが、これが原因でヒネてしまった、そんなパターンがありました。

大半は体の小さな子豚でしたが、大きいのもいました。いわゆる乳太りになってしまった子だったのかもしれません。

乳太りというのは、哺乳中に母乳のみで大きくなりすぎてしまうことを表します。こういう子豚は、離乳後水も餌も摂ることをせずに痩せていってしまうので、実は手がかかります。自分の食べ物、おっぱいだけ！そう思い込んでしまっているのでしょう。

その子たちは他の仲間のようには餌箱に餌を食べに行くといいことをまったくしませんでした。抜き出して溶きミルクを置いてやっても一切興味を示さず、やはり他の抜き豚のお乳を吸おうとするのです。当然みるみる痩せていき、ぺらぺらの薄い体になり果ててしまいました。見かね

て「そんなに母乳が欲しいなら」と、プラスチックのシリンジで溶きミルクを口に入れてやると、すごい勢いで吸い付いてきました。翌日も同じ方法でミルクをやるうとすると、自分から吸い付いてもっとくれとせがむほどでした。



写真3 仲間からお乳をもらおうと一生懸命。

ところが三日目に行くと、彼らには見向きもせず、自分で人工乳を勢いよく食べていたのです。二度とシリンジからミルクをもらおうとはしませんでした。その後、餌を切り替えてもよく食べ、遅ればせながら肥育舎に移動していきました。まるで母乳を心ゆくまで飲まない限りは先に進まないぞといっているよう



写真4 かたまって寝る子豚たち。

でした。  
これは極端な例かも知れませんが、母乳を満足いくまで飲むということ、はさまざまな面で大切なのだと感じました。もちろん乳太りは気をつけないといけません。哺乳期に水

と粉餌を食べることを覚えさせることも大切です。

### 実は暑すぎた！

「病気とかじゃなくて、とにかくやる気がないんだよ」。

ある農家さんはそう言っていました。離乳舎に移動した子豚たちが、移動して三日もたつとみるみる痩せてきて、ヒネばかりになってしまふのです。目立った臨床症状はなく、ただとにかく腹が巻き上がっていく、子豚に活力がなくいつも寝ている、これはなんなんだろうということでした。

私はその離乳舎に何度か行って見て、単純に「なんて暑い

のだろう、そして息苦しいのだろう」と思いました。季節は春先でしたが、実際離乳舎の設定温度はかなり高く、ヒーターはいつも頑張っていました。なぜその設定にするのかを聞いたところ、離乳直後の子豚たちがかたまって寝ているのを見て、「豚が寒がっている」と思ったからだ(写真4)。

通常、子豚を抱き上げると、豚はピギヤーピギヤーと大騒ぎをします。でも子豚の体を自分の体に密着させてやると落ち着いて鳴きやみます。動物は、広い面積でゆるく圧力がかかるくらいの接触があると安心する性質があるからです。

離乳した子豚は不安で寂しくて、なるべく体の接触が多くなるような行動をとります。つまり、仲間とひっついて寝るのです。これを「寒がつている」と勘違いして離乳舎の温度を上げてしまつたというわけですね。豚たちの元気がないものですから管理者は不安に思つて余計に温度を下げられなかつたのでしよう。しかし子豚たちは、簡単にいうと「夏バテ」になっていました。おま

けにヒーターのフル稼働で空気は乾燥し酸素不足の状態で、これが大きなストレスになっていました。

管理者はおっかなびっくりでしたが、温度を下げて豚がダメージを受けることはなく、むしろ活力は戻っていきまふた。

「やる気のある豚」、「元気な豚」にするためには、過保護にするのではなく、むしろちょっと厳しくするほうが、生物が持っている「生きようとする力」を引き出せるのではないか、そんなことを思つた一例でした。

### 実はローソニアだった！

ある農家さんで、離乳豚が次々にヒネていってしまいました。

症状は全身蒼白・下痢・強い腹式呼吸と顕著な削瘦。剖検症状はいつも多発性漿膜炎で、肺からは日和見菌とPRRS、下痢便からは有意な菌はとれず…。

多発性漿膜炎つまりPMWSは、薬剤を添加しても効果は二次的です

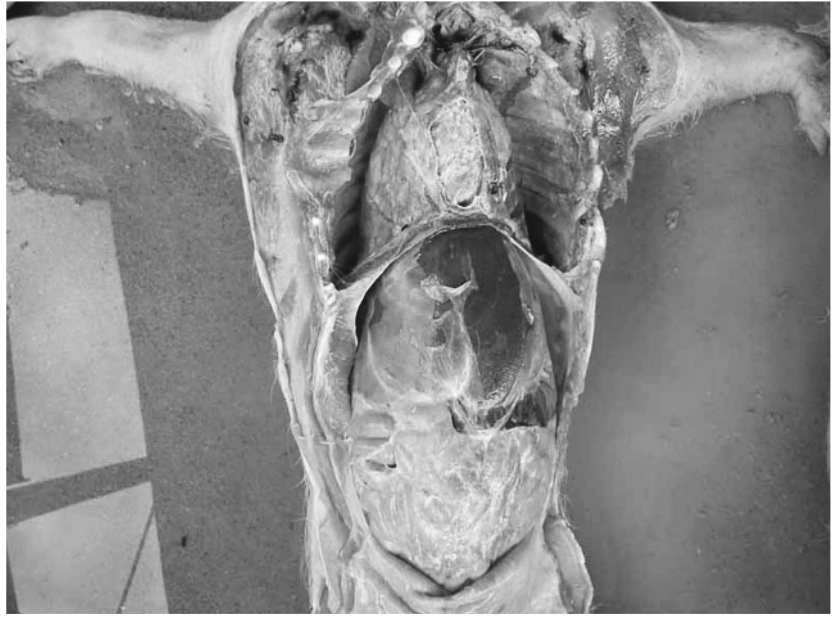


写真5 「卵とじ」様の病変。

て病豚を見逃してしまふ、：いろいろ試しましたが、事故豚の数は高水準で推移し続けました。

私はもう痩せ細って死ぬのを待つばかりの豚たちを見たくなくて、離乳舎の前に死亡豚が出されていても剖検することをやめてしまいました。そのうち、ヒネてしまった豚たちを、これ以上置いておけないので集めて一斉に淘汰す

るということになりました。自分の無力さになれながら、せめて淘汰した豚たちの検査を久しぶりにやることにしました。

ところが淘汰豚の胸腔から腹腔へと解剖を進めて私は驚きました。「卵とじ」がなかったのです。次の豚も、その次の豚も：「卵とじ」というの

は多発性漿膜炎の病変の例えです。豚の臓器が白っぽいゼリー状のもので包まれているのが、卵とじたように見えるので使われています（写真5）。

代わりに見られたのが、腸間膜リンパ節の腫大と回腸末端の肥厚。ロソニアによる増殖性腸炎の所見です。会社へ持って返ってすぐにロソニアのPCRにかけると、結果は陽性でした。

離乳舎にはすぐにロソニア対策でリンコシンが添加され、消毒の徹底と清浄度のチェックを行うことになりました。PMSはなくなりませんでした。症状の改善が見られ

ました。ロソニアによる慢性的な腸炎が栄養摂取を妨げ、疾病の憎悪因子になっていたので、大量の殺処分前になぜ分からなかったのか。いつからロソニアがあったかは分かりませんが、病性鑑定をずっと続けていたら、もっと早い段階で気がついたかもしれない、そうしたら助かる豚も何頭かいたかもしれない、このときの悔恨は、強い戒めとして私の

中に残りました。必ず確かめること、思い込みで病気を決めないこと、あきらめないことです。

### 実はサルモネラだった！

サルモネラ・コレラシスの臨床症状は、PRRSが強く出ているタイプのパMSととてもよく似ています。強い呼吸器症状、激しい削皮、貧血症状、消化器の炎症など。急性のものには鮮やかな赤紫に耳やお腹を染めて急死するので、すぐに分かりませんが、慢性的になってしまうと区別がつきにくい病気です。

サルモネラの厄介なところは、細胞内寄生性があるということです。飼料に添加剤が入っていたり、一度でも抗生物質を注射されるとサルモネラは素早く細胞内に隠れ、普通の細菌培養では一切引っ掛からなくなってしまうのです。

その農場では、夏になってとにかくヒネが増えてきました。豚たちはやたら胸をドキドキさせて、高熱を発し、見る間に痩せていきます。抗

し、母豚群のPRRSに対する免疫が安定するには時間がかかります。とにかく少しでもおかしくなり始めたらずに抜く、抜いた先で治療をする、治療は必ず三日間続ける、換気の種類はどうか、保温箱はどうか、保温箱をつくったが中で寝てくれない、中に寝てくれると見えなく

生物質による治療も効果がなく、こ

れはもう母豚群でのPRRSが落ち着かない限り、事態の収拾は不可能かと思われました。そう、私はPRRSだと思ったのです。肺からは日和見菌しか出ないし、PRRSはどっさり取れるし、実際母豚群でPRRSが動いていたので…。それにしても、病豚の発生が収まらないのが気になりました。PRRSだけが問題になっていく肺炎なら、豚群の抗体が上がってくるにつれて事故の発生・ピーク・終息という動きが見られるはずですが。

これは何か別のものが絡んでいるのではないかと、動物衛生研究所に調べてもらったところ、サルモネラ・コレラスイスが検出されました。しかもそうとう耐性の強い、抗生物質が効きにくいタイプです。

発生初期に急性症状で死亡したものを病性鑑定していれば、菌の分離は可能でした。でも分からなかったのです。農場側は添加剤や注射をたくさん使ったので、サルモネラは細胞内に隠れながら耐性をどんどん得てスーパーサルモネラになっていっ

たのでしよう。

対策として数少ない感受性のある抗生物質を集中的に投与し、菌を持ち歩かないようにするための衛生対策、消毒法の見直しがなされました。

サルモネラは、一度発生すると農場から完全になくするのは難しいものです。涼しくなると収まって、暑くなると出てきます。が、発生パターンをつかんでしまえば、初期にぼろっと出る急性症状豚を逃すことなく解剖し、菌を捕まえることができま

### 実はサーコだった…？

私は、この仕事を始めてからずっと、豚が日々たくさん死んで行くのを見てきました。もう豚が死ぬのもヒネるのも、ある程度はあたりまえなんじゃないの…、疾病の嵐を一度はくぐらなないと、豚は育たないんじゃないか…、なんて勘違いしたくな

るくらいでした。今まで遭遇してき

たケースなんか、どれも完全な解決策はなく、もうどうしたってヒネは出る、それも回復しないヒネばかりヒネをなくすことなんかできない、ヒネを救うこともできない…。何度

もそう諦めてしまいたくなりました。今年の春に発売されたサーコウイルスのワクチン。これを打つだけでヒネがなくなる…、そんなバカな。多くの人が半信半疑だったはずですが。

実際は、想像以上の効果で、驚くべきはサーコウイルスの生体に対する潜在的な病原性でした。そもそもはどんな豚にもいる、つまり豚とうまく共生しているウイルスだったのですが、それが悪さをするようになったとき、われわれには計り知れないレベルで影響を与えたのかもしれない。すべてをこの病気のせいにするのはとても危険ですが、実際ワクチンを打ち始めてからおそらく地球規模でヒネが減ったのではないのでしょうか？

しかし、この病気はワクチンの存在によって解決された、そう思うてしまつたら、われわれは大きな間違

いを犯してしまふ気がします。もとはワクチンなど必要なかったウイルスが、なぜこうなつてしまったのか？ そこにわれわれ人間が関与している要素はなかったのか？

それを理解しないでは、本当の意味でこの病気を克服したとはいえないと思います。

### 実は餌の切り替えが早かった！

サーコのワクチンを打っているのにやっぱり豚がヒネたよ…、そんな農場もありました。解決に導いたのはベテランの奥さんでした。私が手塩にかけて子豚ちゃんたちを、いったいどうしたらこんなに痩せさせられるのか…。分娩舎担当だった奥さんは、鼻息も荒く離乳舎に押しかけ、子豚とその食べてる餌を見て、すぐに言いました。「餌の切り替えが早すぎる」。離乳舎の餌担当はかなり前に変わっており、彼は餌の切り替え時期について、マニュアル的なことしか教わっていませんでした。

そこへ飼料高から購入する餌のラ



写真6 一度みんなヒネてしまったけど、餌を戻して給餌面積を増やしたら、お腹が出てきました。



写真7 生まれたときから大小はあるけど、なるべくみんな大きく育てたい。

象を「豚が自殺している」と言い表しました。結局は人間の管理失宜に対する豚の抵抗なんだと。

豚を囲うだけ囲って、温度と湿度を一定にし、餌と水をおいて、これだけしてあげただから、さあ後は勝手に食べて

シクを落としたことで、子豚たちには成長に見合わない栄養を提供することになってしまったのでした。

豚の成長に合致した飼料をきちんと食べさせること、この基本がやはりとても大切なのだと、餌を戻してからみるみる元気に育った子豚を見て痛感しました(写真6)。

それにしても、私だけで診ていたからこんなにすぐには原因が分からな

### 最後に

かったと思います。飼料の名前も聞かずに、見ただけで分かるなんてすごい…、ずっとやってきた人にはかないません。

ある人は、豚が食べる≡生きることをやめてしまう、ヒネるという現

おつきなってくれよ、というのは確かに乱暴なのだと思います。そのとき、その豚が何を求めているのでしょうか。一―五日もかけてやっと生まれてくる子豚たちですから、なるべくちゃんと耳を傾けてあげましょう。豚はきつと答えてくれるはずです(写真7)。

